

令和7年度 富山大学大学院人文社会芸術総合研究科
人文社会芸術総合専攻（修士課程）人文・芸術プログラム 芸術文化学系
一般入試・社会人入試・外国人留学生入試
入学試験問題

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この試験問題を開いてはいけません。
2. 問題用紙（本文）は3ページ、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚あります。問題用紙および解答用紙に不備があった場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
3. 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
4. 受験番号は、解答用紙の指定欄に算用数字で記入してください。
5. 試験終了後、問題用紙および下書用紙は、持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

初めて牛骨を描いたのはピカソではなからうか。それから四分の三世紀を経た今でも、画学生の間では牛骨はよく描かれる。ピカソが絵になると証明したので、以後、みんな安心して描くようになった。

凡庸な画家は、公認された題材しか描かない。日本画の展覧会へ行ってみなさい。花鳥山水とほぼ題材は決まっている。近年、平山 郁夫^{いくお}が仏教伝来をテーマにシルクロードを描いて以来、その弟子筋が競ってラクダの群れを描いている。一人ぐらいキリスト教伝来とかをテーマに西アジア方面に取材に出かけてもよさそうなのに。

中学生の頃、写生会があると級友たちは決まって僕の後をついてきたものだ。腰を下ろすと、みんなも横一列に並んで座る。東を向いて描き出すと、級友たちも一斉に僕と同じ方向を向いて描き出す。みんなが三分の一くらい描いたところで、きびすを返して西を向いて描く。もちろんはじめから描きたかったのは西に広がる風景だった。

ベニスをよく題材に取り上げて描く画家がいる。たしかにどこを見ても絵になる街ではある。ベニスを何人かの画家で競作した展覧会さえあったほどだ。しかし、このような描き尽くされた題材を取り上げる時は、もっと恥ずかしげに描いてもraithたいね。だって、富士山や薔薇^{ばら}の花を描くのは恥ずかしいもんね。

凡庸な画家は「これが絵だ」と大勢の人たちが認める枠内で仕事をしている。

「絵は四角いものだ」

「油絵の具で描くものだ」

「遠景、中景、近景と重なり合うのが風景画だ」

「地上一七〇センチで横を見て切り取るのが構図だ」

これらは右の画家たち、保守派の常識だが、左でも事情は同じだ。左の画家、つまり前衛派、コンテンポラリー・アートの作家の物差しは、すべて外国製。五〇年代のポロックあるいはデュシャン、六〇年代のポップ・アート、七〇年代のハイパーリアリズムとコンセプチュアルアート、八〇年代のニューペインティング、という具合にたどると、必ず手本にしている外国作家に行き着く。

非凡な画家は、これら左右の常識に、まず疑いをはさむところから出発する。その大勢の考えに与^{くみ}するところを極端に嫌う。自尊心が許さない。

「丸い絵があってもいいじゃないの」

「油絵の具以外に、砂や顔料を使うべきでは？」

「空のない風景てえのはどう？」

「地下から地上を見上げた構図は？」

「蟻^{あり}を拡大して一〇〇号に描いたらどうなるかしら？」

古来大画家は、見るもの何でも絵にしている。要は描き方だ。脇田和^{かず}の絵に、えもんかけにかけられた服のような形が

よく現われる。これとて、毎日見慣れたものだが、凡人はまず描こうとは思わないだろう。しかし、描かれてみると、なるほどおもしろい題材だと気づかされる。絹谷幸二にウンコを描いた大作があった。それで思い出したが、僕も三十代のはじめ、「おなら」を絵にしようと苦闘していた一時期があった。見えないからかえってイメージが広がるのではないかと考えたわけだ。

手垢てあかに汚れた題材は日曜画家にまかせておこう。誰も描いたことのない題材に挑戦しよう。手垢に汚れた題材を描く時は、描き方だけでも新鮮にしよう。今までにない描き方、それでないと意味がない。

佐々木豊『泥棒美術学校』（芸術新聞社、一九九三年）より

問 筆者の考える凡庸と非凡を簡単に説明した後、あなたの考える凡庸と非凡について、各自の専門分野における具体例をあげながら、八〇〇字程度で自由に述べなさい。なお、筆者の考えに対しては、賛成でも反対でもかまわない。